家族にとっての胃瘻、医師にとっての胃瘻

藤田 繁雄
紀南病院外科　医師

脳梗塞後の義母は嚥下ができなくなり、私が２００９年にＰＥＧを造設し、その後４年半を生きました。少し離れた地域に住んでいましたので、管理上の相談を受けたり、ボタン型胃瘻カテーテルを外来で入れ換えたりと、義母の胃瘻に対して医師としての立場で接してきました。

ところが、２０１１年９月和歌山県田辺市の山間部を襲った台風被害で眼前の川が氾濫寸前になり、介護度５の寝たきり状態で命からがらわが家へ避難してきました。義母は、唾液嚥下すらできませんでしたが、咳嗽反射は非常に強く、そのため終日唾液を吐き出し続けなければならず、ティッシュペーパーの山がすぐにできました。台

風襲来の半年以上前からこのような状況だったようです。いわば常時溺れかけているような状態を同居して初めて間近に見たわけです。険しい表情で喀出します。胃瘻を造った張本人としては、これでは胃瘻で生命が維持できる分だけ苦しめ続けていることにならないか、胃瘻造設は人として許されざる行為ではなかったかと考え込んでしまいました。

自宅での介護は妻を含めた義母の娘たちが分担して行いました。体位変換、オムツ交換、清拭、胃瘻からの経腸栄養管理…、自宅介護の現場を初めて目の当たりにしました。ただ、義母の意識は完全に清明で、話をし、笑い、泣いて、麻痺のない左手を動かすことができました。私の3人の娘たちは、義母が亡くなった当時、9歳、6歳、3歳でした。皆、義母が大好きでしたので、いつも横にきて、話しかけ、手を握り、オムツ交換すら手伝ってくれました。子どもの相手をする義母の表情は、優しく穏やかで、お遊戯会や運動会などのビデオを見せると嬉しそうに、声を上げて喜んでいました。私も、そんな表情を見る時だけは、唾液を喀出する音を聞くたびに感じていた罪悪感が薄れて、胃瘻のおかげで娘たちの成長を見てもらえると、ホッとする気持ちになりました。

嚥下ができない人に胃瘻を造って、自宅へ戻っていただく―これは医師としていつも行ってきた仕事です。その医師が同居して生活をサポートする身内の立場になると、冷静に観察することが染みついた医師の目としての側面と、幼い娘たちの父として義母に接する側面が混在した、奇妙な立場になります。前者は胃瘻を造設したことで苦しむ時間を延ばしただけかもしれないという罪悪感を生み、後者は孫たちの成長を少しでも長く見せることができたという喜びにつながります。いろんな考えと感情が交錯し続けた35カ月でした。

自宅で家族に囲まれながら静かに最期を迎えることができたのも、胃瘻があって自宅介護ができたからですが、あの時の胃瘻造設の判断がよかったのか悪かったのか、医師として、家族として、未だに答えが出せずに考えあぐねています。